理論と論説

「黄帝内経」からみた按摩療法

和久田哲司 和田 恒彦 西條 一止

The Study of Anma Therapy in “The Yellow Emperor’s Manual of Corporeal Medicine”

Tetsuji WAKUDA Tsunehiko WADA Kazushi NISHIJO

Acupuncturists, Department of Acupuncture, Tsukuba College of Technology, 4-12-7 Kasuga, Tsukuba-shi, Ibaraki 305-0821, Japan

Abstract This paper is an effort to identify the benefits of Anma therapy’s theory and technique from the ancient literature of Chinese medicine as having significance for modern medical manipulation. Our study is based on “The Yellow Emperor’s Manual of Corporeal Medicine ; Questions about Living Matter, and the Vital Axis (edited in the Sung Period).” The conclusions drawn from the results are as follows :

(1) The name of Anma appears in four parts of the literature. It may be said that there was already a manipulation called Anma in the Han Period.

(2) Generally the term ‘an’ means that sensations are sent downwards in the tonic or syndromic direction, while ‘ma’ means that they are sent upwards in the sedative or antidromic direction, According to the previous two books, however, both ‘an’ and ‘ma’ both have upwards and downwards effects.

(3) It is clearly indicated that applications of Anma therapy are available for paralysis, feeling of cold, stiffness, etc. These conditions are caused by poor circulation of chi (Chinese) and blood. The effect of Anma therapy is to improve such circulation.

(4) Anma therapy was the one original method in the Han Period. In these classical texts, we found that it was highly advantageous to apply other methods with Anma therapy. In order to advance the usefulness of current Anma therapy, it is essential to re-evaluate classical techniques with regard to the fundamental facts and principles of medical science.

Key words : Anma therapy, Yellow Emperor’s manuals of corporeal medicine, theory, technique, clinical application

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), **50**(1), 79-83, 1999

(Accepted ; 30 Nov., 1998)

1 緒 言

医療の原点と目される手技療法はスキンシップ

の療法, 無薬物療法として伝統的に民間に受容されてきた。世界的にも次第に自然療法の一つとして見直されようとしている。

鍼, 筑波技術短期大学鍼灸学科, 茨城, 〒305-0821 茨城県つくば市春日4-12-7

[1998年11月30日受理]

我が国においては古来から按摩療法が広く行われてきたが、しかし按摩療法は明治期に導入されたマッサージ術によって西洋医療の地位が奪われている。今日では国際的には“shiatsu”が欧米諸国において日本の手技療法として受け入れられようとしている。

こうした状況は按摩療法が中国医学における古典理論を基盤として未だ科学に立っていないことと、長年の民間における養生的風潮が起因しているものと考えられる。

中国漢方古典である「素問」、「靈樞」には按摩法が鍼灸や醪薬と共に活用されていたと言う¹⁾。現今の按摩術の基をなしていると思われる江戸時代の「導引口訣鈔」の導引根源の訓や按摩人を選ぶ訓などでは「已病を治せず、未病を治す」

(素問第二)、「緩節柔筋には導引行気をせしむべし」(靈樞第七十三)などを引用し²⁾、また「按摩手引」の附言には「張介賓曰。按摩は気血を巡らすを要とす。(中略)内経にもまたしか言へり³⁾と、「按腹図解」においてもその序に「我醫道も又唐土より傳へしにこそ然れば導引按蹻の技も同じく傳來しにやあらん(中略)醫籍の親と崇る内経といふ書に見えたり⁴⁾とある。いずれも按摩療法は鍼灸と同様、「黄帝内経」を基本として今日に至っている。

そこで「按摩術」が長年にわたって果たして来た療法としての価値を原点に立ち返って、その本来の姿を見極め、現代医療の一つの手技療法として再認識し、臨床応用して行くことが必要であろう。

このような観点から中国医学の最原典である「黄帝内経」における按摩療法の取り扱いについて考察を試みた。

2 方法

1. 使用原本

「重広補註黄帝内経素問」：唐の王冰、次註(762年)を素とする宋の林億等が編集したもの(1050年ごろ)。

「黄帝内経靈樞」：南宋、史崧の校訂版

2. 対象事項

江戸時代の著書「導引口訣鈔」(1713年)「按摩手引」(1800年頃)及び「按腹図解」(1827年)などにに基づき、上記原本における按摩療法に関する語句すなわち「按摩」、「按・摩」と「補・瀉」との関連及び適応疾患に関する病証、そして按摩療法と他の治法に関する記述を検討し、当時の按摩療法の医療的役割を明らかにする。

3 結果および考察

1. 「按摩」療法名称の記述

素問、靈樞には「按摩」と言う名称で一つの治法が明確に既に記述されている。素問では血気形志篇第二十四に「病生於不仁。治之以按摩醪薬。』⁵⁾、および調経論篇第六十二に神気あるいは気の不足に「帝曰。刺微奈何。岐伯曰。按摩勿釋。著鍼勿斥。』⁶⁾、帝曰。刺微奈何。岐伯曰。按摩勿釋。出鍼視之。』⁶⁾の三箇所。靈樞では九鍼論第七十八に「病生於不仁、治之以按摩醪薬」⁷⁾の一箇所にある。

これは従来按摩術に関する最も古い記述は素問異法方宜論篇第十二の「導引按蹻」、靈樞病伝第四十二の「喬摩」と考えられていたが、この原本の記載が正確なものとすれば、「黄帝内経」が成立したと目される紀元前1～2世紀⁸⁾の漢代において既に「按摩」の名称が用いられていたこととなる。

2. 按摩の語義、按・摩及び補・瀉との関係

「按・摩」の語義について今日、一般に「按」は「瀉法」を意味し、「摩」は「補法」を意図するものとされて来た。これは江戸期の「按摩手引」の按摩の項に「この按は押さえることなり(中略)瀉術の理をするなり」また「この摩と言う字はなずることなり(中略)補術に通ずべし」⁹⁾とあることから、これが定説のように考えられてきたものである。

このことについて字義の上から見ると、「按」は手を用いて安らかにするという表意文字であり、「摩」は手をもって麻を擦り合わせて繊維を作るとの意からむしろ「按」は補、「摩」は瀉であるとも考えられる。しかし、説文十二上には「按」は「下すなり」とあり手を加えて抑止する意と、

「安撫するために手をくだすを按と言う」とあり「おさえる・なでる・うつ・あんずる」などである¹⁰⁾。同様に「摩」は「研ぐなり」とあり、それより研磨することから手でなでる行為を言い「する・こする・なでる」の他に「力を加えて撫摩し、おす」の意があるとある¹¹⁾。このことから「按」も「摩」もその字義からみて状況に応じて強弱様々に用いられていたことがわかる。

そこで、これらの文字について素問・靈樞の用例をみると表のようになる。素問では「按」の文字は28箇所（同一箇所にも複数あり）、靈樞では43箇所（同一箇所にも複数あり）ある。これらの「按」の使用状況をみると「触れてみる」「押してみる」（診察）や「軽く揉む、押す、按摩する」（治療）の意など様々に用いられ特に治療にあつては病状に応じて補にも瀉にも応用されている。

一方、「摩」の文字は「按摩」の語を含めて素問には4箇所、靈樞では4箇所でも非常に使用例は少ない。この点について、当時の文献での「摩」の用例を見ると「神農本草經」（2箇所）、「傷寒雜病論」（2箇所）や「難經」（0）においても同様「按」に比してほとんど見当たらない。このことは、この時期には「摩」の術としての認識はまだなく、単に「摩擦する」の意として用いられ、専ら「按」が按摩治法の術として表現されていた。「摩」が術として定着するのはなお後のことであったと考えられる。従って、次項に示すように鍼・灸・薬などの補瀉の処方に応じて「按」の術をもって補的にも瀉的にも併用しており、「摩」は補瀉に拘ることなく平易に用いられていると見ることが出来る。

以上のことから、「黄帝内經」での「按」の用例及び文字の基本的語系からみて、「按」本来の意は補的瀉的に虚実に応じ用いるテクニックであり、摩も後になって按と同様補瀉に応用されるようになったと解するのが適切であろう。

因みに藤林良伯も「按摩手引」の瀉の療治において「指にてくぼむ程をさへるを瀉と云うべし。少しこたゆる程をさゆればその所にしこりたる邪氣にても毒氣にても積氣にても散じて心よし」¹²⁾と意味を補っていることに留意したい。

表1 「黄帝内經」における「按・摩」の用例

按	摩	（按摩）*
素問：28（同一箇所にも複数あり）	4	（3）
靈樞：43（同一箇所にも複数あり）	4	（1）

*按摩については、3-1「按摩」療法名称の記述に記した。

3. 按摩療法の適応

「黄帝内經」における按摩療法の適応に関する記述をみると、素問の異法方宜論篇第十二には「故其病多痿厥寒熱。其治宜導引按蹻。」¹³⁾、血氣形志篇第二十四に「形數驚恐經絡不通。病生於不仁。治之以按摩醪藥。」¹⁴⁾、玉機真藏論篇第十九には痺不仁に拘わる一連の病に「病名曰肝痺。一名曰厥。脇痛出食。當是之時。可按若刺耳。」¹⁵⁾などであり、また調經論篇第六十二に前掲の神氣と氣の不足に対して「帝曰。刺微奈何。岐伯曰。按摩勿釋。著鍼勿斥。移氣於不足。神氣乃得復。（次頁に同様の文あり）」¹⁶⁾とある。

靈樞では官能第七十三に「爪苦手毒。爲事善傷者。可使按積抑痺。」¹⁷⁾と按摩術として適するものを掲げている。また九鍼論第七十八には素問第二十四篇とほぼ同文の「形數驚恐。筋脉不通。病生於不仁。治之以按摩醪藥。」¹⁸⁾とあり、やはり不仁に按摩・醪藥が適応することを示している。

これらからみると「内經」においては按摩という治法は経脈（経水・経金）の氣血の滞り特に氣の滞りによって生じた痿、不仁、痺と言われる運動性・知覚性のしびれ及び厥（厥逆）や寒熱と表現される「のぼせ」や「冷え、ほてり」や神氣・氣の不足などの循環障害、更には積、即ち「しこり」や「硬結」に適応するとしている。これは按摩と言う治法は氣血の流通特に氣の巡りを平かにする療法でその治療目的が明確に示されていることを示している。

4. 按摩術の位置づけ

素問、靈樞時代には様々な療法が駆使されていた。その主な治法に関する記述を示すと資料のようになる。

これらはいわゆる鍼、灸、薬、運動及び手技、心理療法的な呪術や温熱療法による療法である。

資料「黄帝内経」における主な按摩療法と
他の治法の記述一覧

<素問>

- ① 金匱真言論篇第四 (巻一の二十頁)
按蹻. 鍼石.
- ② 異法方宜論篇第十二 (巻四の一～二頁)
砭石. 毒藥. 灸炳. 微鍼 (九鍼). 導引
按蹻.
- ③ 玉機真藏論篇第十九
按. 藥. 鍼. 浴. 湯熨. 火灸.
- ④ 血氣形志篇第二十四 (巻七の十二頁)
灸刺. 鍼石. 熨引. 百藥. 按摩醪藥.
- ⑤ 通評虛実論篇第二十八 (巻八の十五頁)
藥. 鍼石.
- ⑥ 調經論篇第六十二 (巻十七の二頁)
按摩. 鍼.

<靈樞>

- ① 病伝第四十二 (巻十三の二頁)
導引行氣. 喬摩. 灸熨. 刺炳. 飲藥.
- ② 官能第七十三 (巻二十一の三頁)
鍼艾. 導引行氣. 呪病. 按積抑痺.
- ③ 九鍼論第七十八 (巻二十三の三頁)
灸刺. 熨引. 鍼石. 甘藥. 按摩醪藥.

病状に応じて当時の様々な手段を用いていたことを示すと共に、その療法の特性に合った能力ある者が施術にあたることを求めている。按摩治法は鍼灸導引薬などと並ぶ独立した療法として位置付けられ、個々の病状に応じて他の治療法と併用して用いることによって、より高い治効を求めていることが理解される。

また導引按蹻と按摩療法との係わりを見ると、導引の適応に関する記述として、「素問」では前記の異法方宜論の他に血氣形志篇第二十四及び「靈樞」九鍼論第七十八に、「形苦志樂。病生於筋。治之以熨引」^{5),7)}と。「靈樞」官能第七十三に「緩筋柔筋而心和調者。可使導引行氣。」¹⁷⁾とある。これらより導引は筋を対象に筋骨を動かして関節の可動性を図る自己運動法であったことがわかる。一方、按蹻は按は前記のごとく按摩法に通じる語であり、蹻は「足を高く挙げる」の意味とされ術者による他動的な運動操作を示唆しているように

も思われるが、この点についてはなお不明である。いずれにしても筋を対象とする導引と氣血の流通を図る按摩を意味する按蹻とは、その適応からみて異質な治法であったと言えよう。

4 結 語

中国医学の一治法として開始された「按摩」という手技療法は、原典「黄帝内経」の記述内容から見て以下の事項を確認することが出来た。

① 「按摩」という療法は漢代においてこの名称で既に行われていたことは明らかである。

② 按摩の語義は按は瀉、摩は補と解されて来たが、「内経」での「按」の使用状況、「説文」などの語系から見て按は一つのテクニックであって力度や応用によって補にも瀉にも両用されるものであり、摩は後になって按と同様に補瀉に应用されるようになったものと解するのが妥当であろう。

③ 按摩療法は古来より導引按蹻・導引行氣・導引あるいは喬摩などと同義として使われてきたが、「内経」では按摩としての応用範囲が「経絡における氣血の滞りによって生じた病」に対して、これをただす治法」と確立された一療法であった。

④ 内経時代には按摩治法は他の治法と同等の立場で適材適所に应用すると共に、力学的効果を他の治法と併用することによって、より高い治効を求めている。特に鍼治法の前後あるいは施術の中で広く一つの技術として併用されている点に注目したい。

また、導引按蹻として捕らえられて来た按摩療法は導引が筋を、按摩は氣血の流通を対象とする点において、導引と按摩療法とは異なった治法であった。

今後の伝統医療の発展のためにも按摩手技を適切に他の療法と併用し、応用する意義を現代医学的な立場から検討して行くことが肝要であると思われる。

文 献

- 1) 芹澤勝助：日本古来の按摩法、あん摩・マッサージの理論と実技 (第3版), 7, 医歯薬出版, 東京 (1989)

- 2) 大黒貞勝編著：導引口訣鈔，68，谷口書店，東京 (1986)
- 3) 藤林良伯：按摩手引，(1800)，(1835)，河内屋和助 (大坂)，附言
- 4) 大田晋齋：按腹図解，(1827)，(1887)，齋藤儀藏 (東京)，序
- 5) 林 億，他：黄帝内経素問，紀元前2世紀頃，1050頃，血気形志篇第二十四 (巻七の十二頁)，鍼灸医学典籍集成1，オリエント出版，大阪 (1985)
- 6) 前掲 素問，調経論篇第六十二 (巻十七の二，三頁)
- 7) 史崧校訂版：黄帝内経靈樞，紀元前1世紀頃，南宋，九鍼論第七十八 (巻二十三の三頁)，鍼灸医学典籍集成2，オリエント出版，大阪 (1985)
- 8) 魯桂珍，他：中国のランセット，305，創元社，大阪 (1989)
- 9) 藤林良伯：按摩手引，(1800)，(1835)，河内屋和助 (大坂)，附言
- 10) 白川静：字通，12，平凡社，東京 (1996)
- 11) 白川静：字通，1490，平凡社，東京 (1996)
- 12) 藤林良伯：按摩手引，(1800)，(1835)，河内屋和助 (大坂)，瀉乃療治
- 13) 前掲 素問，異法方宜論篇第十二 (巻四の二頁)
- 14) 前掲 素問，血気形志篇第二十四 (巻七の十二頁)
- 15) 前掲 素問，玉機眞藏論篇第十九 (巻六の五頁)
- 16) 前掲 素問，調経論篇第六十二 (巻十七の二，三頁)
- 17) 前掲 靈樞，官能第七十三 (巻二十一の三頁)
- 18) 前掲 靈樞，九鍼論第七十八 (巻二十三の三頁)

要旨 按摩療法が現代医療の一つの手法として有益であることを，中国医学の古典文献に立ち帰り検討を試みてみた。使用原典は宋代に編集された「黄帝内経素問・靈樞」である。結果として以下のことを確認することが出来た。

(1) これらの文献には按摩と言う名が4箇所用いられていることから漢代には既に按摩と言う名の手法があったと言える。

(2) 一般に按は瀉術，摩は補術とされて来たが，文献の使用状況から按も摩もどちらも補・瀉の効果があると解される。

(3) 按摩療法は気血の乱れによって生じる痺れ，冷えや凝り等に適応し，これらの循環障害の改善を図る療法であった。

(4) 漢代には按摩療法は一つの独立した手法であり，他の治法との併用によって高い治効を示すとする。按摩療法の有益性を確認するためには医学的な基礎と原理に基づいて再評価することが肝要である。

キーワード：按摩，黄帝内経，理論，技術，臨床応用